

687 痔疾患手術予定者における術前の大腸内視鏡検査の有用性について

不二越病院¹⁾、富山医科薬科大学医学部成人看護学科²⁾、同第2外科³⁾

山本克弥¹⁾、田澤賢次²⁾、新保雅宏^{1,3)}、
齊藤智裕³⁾、野本一博³⁾、大西康晴³⁾

【はじめに】近年大腸内視鏡検査の発達により早期直腸大腸癌の発見が増加している。当院では1993年から痔疾患手術前に大腸内視鏡を施行してきた。今回その成績と有用性を検討した。【対象と方法】1993年1月から1998年12月までの6年間で行われた痔疾患手術症例は1295例。そのうちの対象者は40歳以上、1年以内に全大腸内視鏡検査（以下・TCF）または注腸検査を受けていない希望者とした。前期3年間はシグモイドスコーピー、後期3年間はできる限りTCFを行うこととした。【結果】検査施行症例は774例、平均年齢55.6才であった。その結果は、異常なし：580例、ポリープ：180例、m癌：5例、sm癌：1例、進行癌：3例、その他：5例であった。全期間の有所見者は194例（25.1%）、癌患者9名（1.16%）であった。これを前期、後期で検討したところ前期416名中、有所見者103名（24.8%）、癌患者3名（0.72%）。後期358名中、有所見者91名（25.4%）、癌患者6名（1.68%）であった。【まとめ】痔疾患手術前に大腸内視鏡検査を774名に施行したところ、9名（1.16%）の大腸癌が発見された。後半TCFを採用したところ、発見率の増加が認められた。発見率は低率であるが無症状の癌患者9名を発見できたことは有用であると考えられた。

688 大腸癌切除後の肝転移早期発見は、治療成績向上に寄与するか？

長崎大学第二外科

小無田 興、原口正史、山本孝夫、岡田和也、
古井純一郎、兼松隆之

【目的】大腸癌術後の厳密なfollow upが、肝転移再発例の治療成績向上に寄与するかを検討。【対象】進行大腸癌211例(Cur A)。対象を前期122例と後期89例に分類。【プロトコール】1) 受診間隔;(前期)術後2年までは3月、以後6月(後期)術後2年までは毎月、以後3月2) 内容;(前期)CEAは、受診時。US、CTは、術後2年までは3月以後6月ごと交互に施行。(後期)CEA、USは、受診時。CTは、術後2年までは3月以後6月ごとに施行。

【検討項目】肝転移再発例の発見時期、個数、最大径、治療切除率および治療切除例の生存率を両群で比較。

【結果】1) 肝転移の発見時期、個数に有意差なし2) 肝転移の最大径;2cm未満(前期25% 後期70%) 2cm以上(前期75% 後期30%)と有意差あり(p<0.05) 3) 治療切除率;前期67%(8/12),後期40%(4/10)と有意差なし4) 治療切除例の生存率;1生(前期88% 後期50%),3生(前期38% 後期-%)と有意差なし。【結語】厳密なfollow upは、肝転移をより小さい大きさで発見する上で有用であったが、切除率、生存率の向上には寄与しなかった。

689 側方リンパ節転移に対する術中迅速病理診断の有用性について

国立がんセンター東病院骨盤外科

小野正人、新井竜夫、杉藤正典、鈴木弘文、川島清隆、
石井 洋、加藤一嘉、森広雅人、小杉千広、小林昭広、
大森聡士

【背景及び目的】下部直腸癌の手術において側方リンパ節転移の有無は、自律神経温存の適応決定に重要な情報である。しかし術前画像診断では正診率が低く適応決定の根拠として充分ではない。我々は自律神経切除を伴う側方郭清の適応決定する為に側方リンパ節をwide samplingし、術中迅速病理診断（以下生検診断）を施行している。【対象及び方法】1996年3月からの下部直腸進行癌51例を対象として、側方リンパ節の術前画像診断、生検診断及び最終病理診断（以下病理診断）とを比較し正診率、疑陽性率、偽陰性率等について検討した。【成績】病理診断から見た術前診断では正診率は73%（37/51）であった。このうち術前診断で陰性例では90%（35/39）の正診率であったが術前診断で陽性例では17%（12/12）と低い正診率であった。また病理診断から見た生検診断では51例中1例を除いた50例98%に正診を得た。結語 術前診断で誤診した14例（51例中）に対し13例に転移の有無に見合う手術を行うことが可能になり同法の有用性が示唆された。

690 RI 標識モノクローナル抗体、その F(ab')₂ 分画およびその Fab 分画による大腸癌 imaging の比較

京都府立医科大学 消化器外科

岡本和真、大辻英吾、小林真一郎、松村博臣、
阪倉長平、山口俊晴、山岸久一

【目的】モノクローナル抗体 A7 を ¹¹¹In で標識した ¹¹¹In-A7 による大腸癌の imaging の場合、¹¹¹In-A7 は分子量が大きいため、血中からの排泄が遅く、腫瘍と正常部分のコントラストがつきにくい。そこで、A7 よりも分子量の小さい A7 の F(ab')₂ 分画および Fab 分画を作製、各々を ¹¹¹In 標識した ¹¹¹In-A7F(ab')₂ および ¹¹¹In-A7Fab による大腸癌 imaging について比較検討した。【方法】①¹¹¹In-A7、¹¹¹In-A7F(ab')₂ 及び ¹¹¹In-A7Fab の抗体活性を WiDr を用いて inhibition assay にて測定。②¹¹¹In-A7、¹¹¹In-A7F(ab')₂ 及び ¹¹¹In-A7Fab の生体内分布を、WiDr 移植ヌードマウスの腫瘍、血液を経時的に採取して測定。【結果】①¹¹¹In-A7、¹¹¹In-A7F(ab')₂ 及び ¹¹¹In-A7Fab の抗体活性は、ほとんど低下していなかった。②¹¹¹In-A7、¹¹¹In-A7F(ab')₂ 及び ¹¹¹In-A7Fab は、各々静注後 72、24、6 時間目に最も腫瘍に集積した。【結論】¹¹¹In 標識した抗体による大腸癌 imaging に関しては、抗体の F(ab')₂ 分画が、抗体の whole body や抗体の Fab 分画よりも適していると考えられた。